



赤  
花

8

2020

りっかはいくかい

大陸の祖父の母校や麦の秋  
文の日や切手不足でもどりけり  
梅雨明けを待てずに姉は逝きにけり  
蝉生まれ報告をする母も亡し  
梶の葉に硯洗うてをりにけり  
川床に酒傾けて聴く河鹿  
去来抄読み返しゐる黴の宿  
船笛は気のせいなのか原爆忌  
目の前に夏の草木の八時半  
公園に香煙けむる原爆忌

七月十一日

夏草の今は刈りあり亭子邸  
松江城傾けながら舟遊  
足首に日の差し来たる昼寢覚  
雲の湧く明石海峡穴子飯  
芋虫の世話やきに来る夏の蝶  
湾内に鱒の入りくる盃蘭盆会  
墓参り県を跨ぐに障りなし  
一個のみ柘榴を供へ拝みけり  
炎帝や昼は咖喱と決めてをり  
熊蝉や雄おっこう岡雌めっこう岡ゆすりあふ

蟋蟀抄

雪嶺抄

山吹 志方 章子

麦青む 笹村 政子

山吹の黄に一点の曇りなし  
夜桜に帰宅の足を止めらるる  
風吹ける春の落葉に音生まる  
親雀子雀見分けつかずなり  
藤棚に場所を移して話しけり  
故郷に父母は在さず蛙鳴く  
真夜中の厨に浅蜩動く音  
一品は子の釣りきたる鱧を焼く  
芍薬を活けて笑顔の遺影かな  
葉桜に心地よき風渡りけり

高層の目の前に来しつばくらめ  
麦青む萩往還の一里塚  
菜の花や鳥に嫁ぎし叔母ひとり  
糶台に跳ねてしんがり桜鯛  
そら豆の花の斑点雨しづく  
春深しジャングルジムの影もつれ  
三線の公園に来て蝶に弾く  
剪定の一枝がとんで弾みけり  
ちぎりては母の手になる蒿苣なます  
かがり火に山影ゆるる夕蛙

山稜抄

はまなす抄

朴の花 藤生不二男

茉莉花 升田ヤス子

掛小屋の屋根をにれる花の屑  
桜葉降るいつの間に友逝けり  
蝶の昼話むやみに飛びにけり  
天文館ポプラの絮の漂へる  
清明や庭畑に出る野良頭巾  
瑠璃とかげ墓原にきて発光す  
蝌蚪孵れこの水たまりあとわづか  
梅は実に誰かが付けし守り札  
線香に畳を焦がすリラの冷  
茉莉花のむらさき匂ふ夜明けかな  
いづくにか風の音ある朴の花  
青鷺の一点いまだ見逃さず  
鉢僧の笠を引き寄せ青嵐  
兜虫いきなり飛んでしまひけり  
合歓咲いてあかるき雨の降りにけり  
手を添へて新茶のしづく切りにけり  
よるべなき暗みを飛び梅雨の蝶  
教師みなペダル踏み来る麦の秋  
卯の花の雨の重たくこぼれけり  
やすやすと風のかよへる夏木かな

野遊び抄  
八十八夜

住田千代子

蒼天へ届けとばかり花蘇枋  
鯉跳ねて水の濁りや八重桜  
賑やかな声の中なるしやぼん玉  
丈いまだ整はずして藤揺るる  
白藤の大樹に絡む真昼かな  
信号を待つひとときの花りんご  
田の水の月は八十八夜かな  
岩に影そよぎてゐたる若楓  
姿良き形に散りたる八重桜  
石鹼玉爆ぜて良き日の予感かな

聖五月抄  
バイク旅5句

善野 行

バイク旅五句  
隧道を抜けあふらるる桜まじ  
青柳に触れ白無垢の角隠 倉敷  
溝川へ降りて挿頭や花の枝 備中松山  
釣り人の影となりけり春没日 皆生温泉  
落椿拾ひて母を追ふ子かな 津山  
菜の花の胸すくやうな広野かな  
花屑に木漏日縞をなせりけり  
桜葉降る溝川の堰の音  
夕映にふくらむ山や百千鳥  
存分に陽に愛されて山笑ふ

箕面抄  
滝の水

明楽慧沼  
棕 櫚

出口 誠

永田万年青

つばくらめ翻りつつ黒雲に  
春日差す籠りて窓の外見たる  
春光や窓全開に深呼吸  
春光や雨後の山川草木に  
明易や眠れぬままに始発音  
一の谷源平咲きの躑躅かな  
走り梅雨樹の葉の塵を流しけり  
そびえ立つ主無き棕櫚薄暑来る  
唐突に斜めの雨や春あらし  
春マスク無口どうしの見詰め合ひ

夏の宵同じことばを二千回  
開いたドア両手で閉めて夏の宵  
新緑やボール遊びの子らが居て  
新緑の山を映して池の水  
新緑の池にかかれるくの字橋  
新緑の中に一本赤葉の木  
滝の水三本に別れ落ちにけり  
滝の水三つに割れて落ちにけり  
滝の水元気にしぶきあげてをり  
滝の水持ち帰れずに終はりけり、

タジツサ物語  
茅花野

田尻 勝子

茅花野に風の深さの写りけり  
淳一のすずらんの花終りけり  
万緑や淡路の島の肥満せる  
鱗粉に咽びて放す夏の蝶  
杖代りに孫を連れ出す麦の秋  
天よりの言霊下り来柳の芽  
若葉風乳房の影を踏み歩く  
地球病む誰れ彼れとなくマスクして  
くちなしの夕こそ香れ亡き人に  
高層のビルの見下ろすひつじ草

蒟蒻物語  
やかん

谷口 一献

妻の機嫌付度をする夏の暁  
空つぼの都会の空に緑さす  
小生も猫も大儀な薄暑かな  
石塔の影涼しげに兵庫の津  
念入りに洗ひて夏のマスク干す  
香水はでも汗臭いよりはいい  
ワインレッドの自転車に走梅雨  
短夜に編集後記書き出しぬ  
鼻白む話麦酒で流しけり  
昔薬缶今はペットの麦茶注ぐ

山河抄  
詰襟の傷

平居 零子

破り捨てし文の交りぬ花笈  
封筒も切手も桜見舞状  
桜葉降るザックをゆすり上げるたび  
山里を空へ押し上ぐ山桜  
詰襟のカラーの傷や四月尽  
花栗や今では遠き記憶の香  
乳母車枝垂桜の傘の中  
山肌の透き間を飾り山桜  
牡丹の崩れる様を猫見つむ  
王陵の谷に緑のほむら立つ

廣畑 育子

夏立てり幼なの声の良くとほる  
片恋の猫ゆつたりと畦はなれ  
花みかん灰色の尾を立てし猫  
海風に声かすかなる夕燕  
老鶯や中洲に入り日差しにけり  
子と共に一人で剥ける蚕豆を  
乳母車の脚を弾ませ夏の芝  
六月の溢るるほどの薔薇の香よ  
木洩れ日の我が背丈程ゆすらうめ  
栗の花匂ふ此所から彼所まで

夕つばめ

作用抄

落の佃煮

大内 幸子

二尺ほどベランダ泳ぐ鯉幟  
宅配便落の佃煮入れ忘る  
青嵐鳶と鴉のこぜり合ひ  
庭手入れ住みついてゐる蜥蜴かな  
ひとり居の一人居訪ね春日傘

相生抄

馬刀貝

江見 巖

水切りの三つで終はる沈丁花  
馬刀貝のとび出してくる力かな  
虎杖のぽんと音する料理かな  
吉備津造りの長き回廊白牡丹  
プリムラや籠より覗くフランスパン  
潮まねきをとこばかりが鉄ふる  
白熊の氷ほしがる梅雨入りかな  
兄弟のどちらが先に道をしへ  
梔子の花交番に人居なく  
街道の仇に会ふや柿の花  
祖母の許自肅解除や新樹光

韋駄天抄  
仏師の庭

延川五十昭

紅白の躑躅咲き分け須磨の寺  
須磨浦の小貝にまじる荒布かな  
運慶の彫りし鬼面や山笑ふ  
丸太積む仏師の庭に草茂る  
青葉風敦盛塚の蕎麦啜る  
蟻地獄古寺を囲める野面積  
蟬時雨古城を囲む廓町  
黄睡蓮生けある江戸の切子かな  
浴衣着て赤き鼻緒のゴム草履  
シャーベット舐めつつ仰ぐ伊吹かな

延川 笙子

作用姫抄  
松帆の浦

若葉風敦盛塚を通りけり  
葉桜の根方に淡き芝桜  
静もれる源氏の寺や雛の声  
源平の戦地図売る蕎麦屋かな  
目白来て花橘の実の小さし  
砂浴びや松帆の浦の雀の子  
狛犬の微笑む社牡丹咲く  
花の山息を弾ませ登りけり  
八重桜房ごと散りてをりにけり  
藤棚の下に芭蕉の句碑のあり

# 二上の眉はやさしく春の月

平居 澪子

山の端のほのかなさまを眉墨に、また、美しい眉を山の稜線に見立てていう。「遠山の眉」などとも言い、遠山のようにほんのりと青い眉。また、うっすらと引いた黛。美人の眉や黛をたとえていうさまで二上とは奈良の二上山。いかにも春の月に相応しい形容で古典的な響きのする句。いよいよ澪子俳句の実力発揮。